

追悼記事

偉大な師、石浜明先生を偲んで

安田 二朗

長崎大学高度感染症研究センター

日本ウイルス学会名誉会員であり、学会の発展に多大なご貢献をされた石浜明先生が、2022年12月23日にご逝去されました。石浜先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

先生から多くのことを学んだ弟子のひとりとして、感謝と追悼の意を込めて、本稿を寄稿させていただきます。

石浜先生は名古屋市でお生まれになり、1957年に地元の名古屋大学に入学されました。大学4年生の時に60年安保闘争が起き、名古屋大学の全学の副委員長として学生運動に傾倒しておられましたが、体調を崩された時に先生や友人が大層心配してくれたのを機に学生運動からきっぱりと足を洗い、大学院に進学し、それ以降は研究に邁進するようになったと伺いました。

先生は日本の分子生物学の草創期に、ご自身曰く“分子生物学を専攻する日本最初の大学院生”として研究者人生をスタートされ、その後生涯を通じてRNAポリメラーゼ、及び同酵素を核とする転写装置の研究に全身全霊を捧げられました。先生の研究の主戦場は、原核生物、特に大腸菌のRNAポリメラーゼおよび転写制御機構の解析でしたが、京都大学ウイルス研究所におられた70年代中頃には水痘性口内炎ウイルスのRNAポリメラーゼの機能・構造解析、そして、70年代後半から80年代前半にはトリやマウス由来レトロウイルスの逆転写酵素の精製と機能解析にも取り組まれて、独自に開発された逆転写酵素の精製法はT社に伝授され、その逆転写酵素が国内の研究者に広く使用されていたそうです。80年代には研究対象をインフルエンザウイルスにも広げられ、多くの先駆的な研究成果を発表されました。私が国立遺伝学研究所（遺伝研）で石浜研究

室の大学院生として在籍していた1991-94年当時はRNAポリメラーゼのMolecular anatomyという言葉を先生が好んで使われており、ウイルス（インフルエンザウイルスなど）、原核生物（大腸菌など）、真核生物（分裂酵母 *Schizosaccharomyces pombe*）のRNAポリメラーゼの精製・機能解析・構成因子の解析、*in vitro*再構成などの研究が盛んに行われていました。また、先生は他大学・他機関の研究者、特に研究環境が整っていない若い研究者に積極的に研究の場を提供して共同研究も進めておられました。今考えると、自分の研究室だけでなく、研究分野全体の発展を俯瞰的に考えておられたのだということが理解でき、なかなか自分には真似できないことを実践されていたことを今更ながら認識させていただきました。

先生の偉大な研究業績は、先生が発表された558報以上に及ぶ学術論文で辿ることができます。私がそれと同じく敬服するのは、先生の教育者としての傑出した能力と業績です。これらは、石浜研の大学院生はほぼ全員が途中でドロップアウトすることなく、修了年限内に学位を取得していたという事実と石浜先生の薰陶を受けた40名以上の門下生がPrincipal investigatorとして様々な研究分野で活躍していることにより証明されています。自分が指導する大学院生に修了年限内に学位を取得させることの大変さは、自分が学生を指導するようになって改めて認識しているところですが、石浜先生が長年にわたり、何十人の大学院生に対して実践してきたという事実には日々感服いたします。ある学会誌の対談の中で、石浜先生が「世の中には、インパクトファクターの高いジャーナルにしか（論文を）出さないと決めている先生がいるけれども、あれは教育上よくないです。学生はやっぱり何か論文ができるれば、一つ何か達成感ができるわけですから、それなりのレベルのジャーナルでいいから論文を作つてあげるということを僕はずつと考えていました。」と語っておられるのを拝見し、まさにその通りだと思いました。この姿勢は、大学教員として私自身常に肝に銘じている先生の教えの一つとなっています。実は、同様のお考えを当時の遺伝研所長であられた富澤純一先生からも伺ったことがあります。富澤先生は、博士号というのは運転免許証のようなもので、

連絡先

〒 852-8523

長崎市坂本 1-12-4

長崎大学高度感染症研究センター

新興ウイルス研究分野

TEL/FAX: 095-819-7848

E-mail: j-yasuda@nagasaki-u.ac.jp

もっていないと研究の世界で相手にされないが、学位論文がどの雑誌に掲載されたかというはどうでもいいことであり、研究指導者は自身の指導する大学院生に出来るだけ早く博士号を取らせて、研究者として送り出すことを第一に考えるべきであるという主旨のことを仰っていました。オーバードクターでもう少しデータを足せばもっといいジャーナルを狙えるのにと思うことはしばしばありますが、オーバードクターをさせずに学位を取らせる方が学生本人はもとよりサイエンスの発展のためにも有益なのであろうと考え、偉大な先生方の教えに従っています。今のところ、ほとんどの大学院生に対してこの教えを実践できており、昨年5月に石浜先生にこのことをお話しした時には少しうれしそうな表情で頷かれておられたのが良い思い出となっています。

先生が亡くなられる7か月前の五月に五十嵐和彦先生（東北大学）、石黒亮先生（法政大学）のご尽力で、三十名以上の門下生と先生ゆかりの研究者が石浜先生を囲んで近況報告や研究発表を行う会が開催されました。先生はご闘病中にもかかわらず、二日間熱心に発表に聞き入っておられました。数日後、先生から私宛に私が発表した研究論文のPDFファイルを送って欲しいとご依頼のメールをいただきました。その時初めて、私も研究者として先生に少し

は認めていただけたような思いがして、大変うれしかったです。また、その時にいただいたメールには、多くの門下生、共同研究者が様々な分野で活躍していることを大変誇らしく思っておられることが書かれており、更に、メールの最後に「一つの生物の全転写因子の制御標的の同定と、その結果を基にした制御ネットワークの解明」を目指した研究に没頭したいと思っています。」という先生のお言葉があり、ご闘病中にあっても先生の研究に対する情熱は昔と全く変わっていないということが良くわかり、敬服いたしました。

今こうして追悼文を書いていても、先生の様々なお言葉・エピソードが思い出されます。先生はまだ研究を発展させて行きたかったことと存じますが、先生の研究に対する情熱、遺志は先生が育てられた多くの弟子に間違いなく引き継がれています。

拙い言葉でしか、先生にお札を申し上げられませんが、あらためまして先生のご冥福をお祈りいたします。

注記：石浜先生のお名前は「石濱明」が正式ですが、先生ご自身が「石浜明」という漢字表記を好んで使用されていましたので、本追悼文では後者の漢字表記を使用させていただきました。

故 石浜明先生 御略歴

1938年	名古屋市で生まれる
1957年	名古屋大学入学
1961年	名古屋大学大学院 分子生物学研究施設（大沢省三先生） 分子生物学を専攻する日本最初の大学院生
1963年	金沢大学分子生物学研究施設・助手（龜山忠典先生）
1967年	Albert Einstein College, NY・博士研究員（Jerard Hurwitz先生）
1970年	京都大学ウイルス研究所遺伝部・助手/助教授（由良隆先生）
1972年	京都大学ウイルス研究所化学部・助教授
1984年	国立遺伝学研究所分子遺伝研究部門・教授
2002年	日本生物科学研究所
2004年	法政大学工学部・教授 生命科学部創設準備
2007年	法政大学生命科学部・教授
2012年	法政大学マイクロナノテクノロジー研究センター・教授



石浜明先生先生